
公爵子息になりました。

シロクマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵子息になりました。

【Nコード】

N4863N

【作者名】

シロクマ

【あらすじ】

ポケモンのいる世界で暮らしてた主人公（女）がハルケギニアで公爵子息になって転生するお話。そして死に別れた元恋人（男）が伯爵令嬢になって再開しちゃうっていうお話。

いわゆる前世なお話 (前書き)

更新は不定期です。

いわゆる前世なお話

齡18歳、高橋ハヅキ。

彼女は刻一刻と死が確実に迫って来るのを感じた。

ただでさえ敵との交戦中【能力】も使い、体力も底を尽きかている。全滅させたとはいえ、その代償がこの様か。

ハヅキはミクニ・コーポレーションに所属する治安維持部門第1部隊。

通称【Black】のエージェントである。

今回、シルフカンパニーからの要請により、社内から強奪されたマスターボールの奪還を命じられた1人だ。

マスターボール、ね。

「・・・そんなものまだ作ってたのか」

ハヅキは嫌そうな顔を隠すことなくつぶやいた。

どんなポケモンでも捕まえることの出来る理想のボール。

それがたとえ、伝説であれ。

トレーナーにしてみれば生唾もの一品。

「（…気持ち悪い。）」
もっともハヅキにとっては嫌悪の対象でしかなかった。

トレーナーを選ぶ権利だってポケモンにはある。
機械によって意思を捻じ曲げる時点で、ポケモンに対する配慮が欠けているだろう、というのが彼女の見解だ。

そしてこれに関する議論で、御国とシルフはいまだ揉めている。
それは現在も平行線のまま、決着は付いていない。

ポケモンのためのものづくりか、トレーナーのためのものづくりか。
両者のベクトルは似ているようで、根本が異なっているのだから衝突は避けられないのだった。

そんな関係であるにも関わらず、今回の依頼を私達に頼むのは…やはり少々都合が良いような気がしてしまう。

というか盗まれるとか何考えてんの？
ちゃんと警備しろよアホが。

怒りがふつつつとこみ上げてくるが、まあボールが犯罪者の手に渡ることを考えれば、こうして阻止できたのがせめてもの僥倖だろう。それにこの事件は【マスターボールが悪用される懸念】という、こちらにとって格好の議論に有利な材料を手に入れたようなものなのだ。

これはシルフに劣勢だったミクニの意見が優勢になる格好のチャンス。

それだけがせめてもの救いだった。

「隊長つ追手が後方より追いついてきます！」

「数およそ19人！」

「19人か、また微妙な人数を……。分かった、私が敵を食い止めるから、その間に帰還して。」

一人が残り、歩みを止めて敵を待ち受ける。

戦力的に見てもそれが最善だと思った。

「ちょっと人数的に時間かかるかも知れないけど……ユウジ、先に本部にボール持ってつてくれる？」

「人数聞いてたのか!？」

「一人でなんて無茶に決まってるだろ!!！」

「追っ手がこれだけだとは思えないし、他にも同じようにいるのだとしたらここでこれ以上人数を減らすのは得策とは言えない。援軍を待つにしても、今は5人しかいないんだから」

「けど、お前……!！」

「大丈夫。最悪、人数間引きするくらいにしておくから。ね、隊長

「？」

「…ちゃんと戻ってこい。今日は」

心配性な仲間は事の重要性を理解しているので、今回はいつものような苦言は呈さなかった。

「分かってる、今日だけは予定を狂わせるわけには行かないし。良いから早く行って！」

見送った後、ハヅキは既に肉眼でも認識できるほど近づいて来た追手に顔を向け、ベルトからボールを取り出した。

「グラエナ、ウィンディ」

（ 　　にほんばれ、ほのおのうず。 ）

指示を口に出すことなく、頭に思い浮かべただけで彼らはその意思を汲み取り、従う。

それがハヅキの能力。

ポケモンと信頼関係を結ぶことを条件に発動する、一種のテレパシィ。

ごくまれにこういった力を持った人間が一定の年齢になると覚醒する。

人々のこういった能力は

悪戯好きの神の名にちなんで【ロキ】と呼ばれた。

「ん・・・やつぱまだちょっと多いな」

人が19人だとすると、ポケモンの数は更に多い。

さすがにグラエナとウィンディでは辛いものがある。

「しょうがない、みんなでやるっか」

残るポケモン達もバトルに参戦させる事にする。

ルギアの背に乗り、パートナーに指示を送る。

（ルギア、念力で足止め。ウィンディは中心にだいもんじ。

グラエナ、ライチュウ、ハッサムはだいもんじから逃げてきた奴をほのおのきば、アイアンテール、バレットパンチ。

今の攻撃でフィールドに出ている3分の2程の数が減った。といってもこれだけの攻撃を見せられたあとだ。残りは慎重に攻めてくるはず。

そう思い身構えたら1人の男が話しかけてきた。

「さすがはBLACK！人数の有利など軽くいなしてくれるか。」

「……………」

なにこいつ余裕ぶっこいてんの？
いらつく。

この男をこんな態度にさせる要因……。
一体何だ？

「なんだ、俺じときに話す言葉はないとでも言っのか？ずいぶんと
気位が高いようだ」

「グラエナ、かみくだく」

グラエナを奴の至近距離に向かわせた。

間一髪、すれすれで男は避けた。

「おっと、いきなりだな。よほど余裕が無いらしい。まあ、マスターボールを取り返すためにずいぶんと闘ったようだしな。ふん、そろそろ楽にしてや・・・」

「いちいちうるさいな、ガブリアスじしんっ！」

刹那、地面に衝撃が走った。

「くっ・・・なぜ後方からだと！？いつの間に」

ボールから出してすぐあなをほるしてたんだけどな。

もしかしたら気づかれてるかもっていう懸念は杞憂に終わった。

奥の手のつもりだったんだけど、必要なさそうだったし…ガブリアスは目立ちたがりやな子なのでこの場で活躍させることにした。

「くそ・・・っハハハ！！だが俺には切り札がある！ボスから預かったこの【アウトキャンセラー】があれば・・・」

「それってまさかこれのこと？」手にしたアウトキャンセラーを敵に向けてやる。

「っかない！？貴様いつの間に！」

わお、ベンゴ。

【アウトキャンセラー】…使用するとトレーナーの意志に関係なく場に出したポケモンをモンスターボールに戻す道具。

「さっきかみくだくを指示したときにちょっとね。てか、私のグラエナがそうそう攻撃外すわけ無いでしょ」

かみくだくはフェイク。

本当はどろぼうを指示しただけ。

「くそつくそつくそつ！！これでは計画が台無しだ！たかがガキにつ！ヘルガー、あくのはどう！」

「くくくゴルバット、エアスラッシュ！」

「くくく」

「くくくニャット、のしかかりだ！！！」

「くくくニューラ、れいとうパンチ！！」

「ドンカラス、バカぢから！」

「めんどうだ。ガブリアス・・・」

全員にりゅうせいぐん」

・・・やったか。

「みんなお疲れ様。よしよし」

まだ残っているポケモンはいる。

でもトレーナーが戦闘不能な以上、大してなついてもいない支給ポケは応戦しない。

目的は達成したな。

あとは仲間を追いかけて本社に戻れば良い。

最初から人だけ倒せば良かったんだけど・・・これは最後の手段だからな。

トレーナーとしての尊厳にも関わる問題だし。

常習的に行っていたら最悪、ポケモン所持ライセンスまで剥奪されかねないからあまり使えない。

つまりそうほいほいとやっていい行為じゃないってわけだ。

一番合理的なんだけどなあ…残念。

ルギアの背から降りて敵ポケモンの回収をする。

こういった犯罪組織の持つポケモンはもともとが盗まれたりしたものである可能性が高いため、こうして回収を行うのが決まりになっている。

無論、戦力削減という目的でもあるが。

皆で協力してボールを拾い集め終えた。

「さて、みんなお疲れ様。戻って良いよ」

ルギア以外のポケモンをボールにしまう。

「ルギア、本部までお願い」

ルギアは頷き手にモンスターボールをいっぱい抱えた私をねんりきで浮遊させ、再び背に乗せようとした。

今思えばこの時の私は気が緩んでいたのかもしれない。

その時だった。

パン　　！！

辺りに銃声が響いたのは。

いわゆる前世なお話。(後書き)

宿題やってないのに。なんでこんなに時間掛けてんだ自分。

前世終了(前書き)

勢いで書いたけど小説って難しいな…。

前世終了

「あ、あッ……!!」

衝撃に一瞬頭が真っ白になり、背中から腹を突き抜けた弾丸は私に痛みと混乱を与えた。

痛い。

誰が。

どこから。

それだけが頭の中を支配した。

しかしルギアの怒り狂う鳴き声、エアロブラストの光、人の叫び声を認識した時、ようやく我に帰る。

片足をひざまずけながらも、もう片方の足でなんとか倒れそうになる体を堪え、体制を保つ。

「……はっ……はあ……!」

意識が途切れそうだ。

手放してしまいたい。

そんな欲求を振り切り、背後の光景に目を見やる。

そこには………大火傷というには生易しい程の惨劇が広がっていた。

人の形をした炭。

例えるならこうだろう。
それがゴロゴロと辺りに転がっている。

さっきのエアロブラストがもたらしたもの、だろう。

今まで、敵がどうなるかと知った事じゃないって思ってた。

けれど…人を殺した重圧と、ルギアにそんなことをさせた罪悪感の
2つが一気にのしかかってきて。

「こ…なに、重いも、なん、だ…ね」

知らなかった。

油断したことを後悔しても、自分を正当化させても、ちっともぬぐ
えない。

人を殺した。

私がそうさせた。

「ルギア…ア、ご…めん」

こんなことさせたくなかったのに。

あ、目え霞んできた…。

泣いてるからかな。

まぶたが重い。

哀しみに満ちたルギアの鳴き声が聞こえる。

私の死を嘆く心がこの能力で胸いっぱい伝わってくる。

そっか…人ってこんな簡単に死んじゃうのか。

やだなあ…。

まだやりたいことたくさんあるのに。

よりによって今日かよ。

今日は…ハルトの命日なのに

大切な、私の恋人。

初めてあんなに好きになった人。

あいつは…きつと天国だから、会えないだろうな…。
…地獄ってホントに落ちるのかな…やだな。

後悔する事はいっぱいあるけど…幸せだったと思う。

それでも。

私は欲張りだから。

「まだ……生きて、たいよ……ッ！」

そう願わずにはいらなかった

。

前世終了（後書き）

次はハルケギニアでの話に移ります。

転成開始 (前書き)

今回は短いです。

相変わらず一人称や三人称がごちやごちやするとおもいますがご了承ください。

転成開始。

目を開けた時視界に広がったのは、幸せそうにこちらに微笑む男性と女性の姿だった。

誰？

「（地獄の番人……な、わけないか。）」

思わず自分の走らせた考えに失笑する。

どちらかというと天使だとかいう部類に入りそうなくらい柔和な顔をしているこの男女。

しかしだからといって天国とも考えづらい。

自分がそこまで善良に生きてきたとは、とてもじゃないが思えないからだ。

そして何より、先ほどの敵が黒塊と化した光景が頭をよぎる。

…あんな事をしでかして、のうのと来れるような場所じゃないだろ、普通。

しかし最も疑問なのはその2名の微笑みがなぜ私に向けられているのか、ということだ。

「、、」

笑顔でなにやら興奮したようにしきりに女性に話しかける男性。

女性「、、」。

対照的に穏やかに、しかし若干顔に疲れの色が窺える女性。

……てか、何語？

まさか、死後の世界では新たな共通語でも学ばなければいけないのか。

…いや、もっと現実的に考えよう。

こうして聞く限りは、それとなくヨーロッパ語圏の言葉に近いよう

に聞こえるが。

英語はともかく、その他の言語は分からない。

本来、こうして気がついた時点で自分の置かれている状況をこの方達に聞くべきなのだが、言葉が理解できないとなると…参ったな。でもやっぱりだめもとても良いから英語話してみた方が良いんじゃない……。ちょッ！

必死に思考をめぐらせている最中に、彼らが動き出した。

というか、私が動かされた。

いわゆる、【たかいたかーい】である。

今までなんとなくではあるが無害だと思っていた人のいきなりの暴拳に軽くパニックになった。

言葉が通じないにも関わらず叫んで講義したが…やはり、何事も積極的に行動してみなければ物事は進まないのかもしれない。

そう悟ることが出来た。

「あうああいあー！」

まともにはしゃべることすら出来ないって、おいどうした私。
思わず自分の体を見張る。

手が短い。
短足。
とつか小さい。

決して悪口じゃない。
これが私の身体的特徴だった。

体から血の気が引いていくのを感じる。

なんだ、これ。
これじゃまるで……。

赤ん坊じゃないか。

それを認識したとたん、何かがストン、と体の中に収まったような
感覚がした。

そうか。

あの時死んで、生まれ変わった。

そしてこの人たちが……

新しい私の、両親。

こうして私は新しい形で生を受けた。

転成開始。(後書き)

次はもっと話を深いものにしていけると思う。

幼少時代。

生まれてすぐは、自分の持つこの知識を正直もてあましていた。

生まれたばかりの赤ん坊のすることなど、寝るか、食べるか、排泄するか。

それ以外のことをすれば、いくら無条件で愛してくれるこの両親でも、気味悪がられて捨てられるかもしれない。

一人で生きる術など、幼い私は持っていないのだから。

外に放りだされたら、それで終わり。

なんて脆弱な体なんだろう。

しかし私は利害だけを考えて生きてきたわけではない。

本来の赤ん坊としての精神がそういった気持ちを引き起こさせたのか、真偽のほどは不明だが無意識にこの両親に愛されることを私は欲していた。

嫌われなくなかった。そんな理由で、私は普通の赤ん坊らしく過ごすことを意識して暮らした。

お腹がすいたら泣く。

トイレに行きたくなったら泣く。

眠くなったら泣く。

子供の涙腺はどうもゆるいらしく、ただのウソ泣きのつもりだったものが本当に涙がポロポロと出てくるのだから夕チが悪い。

ハイハイは6ヶ月くらいから始めるようになった。

多少早すぎるかなと心配したが、周囲は単に早熟な子と喜んでくれているようだった。

安堵するとともに、その周りの反応に私も嬉しくなった。

すぐに歩くようになる足腰が弱くなるとつる覚えな知識にあったのでどうしようか迷ったが、念には念を入れ、ハイハイ期間は長く見積もることとした。

ハイハイで行動範囲の広がった私は隙をみて屋敷中を散策する。

ちなみにもっとも抜け出しやすい時間帯はお昼寝の時間帯と朝方だ。

それにしても…さすがに家が広すぎるんじゃないか、これは。

そしてそれに見合うべく使用人の数も多い。

抜けだしたといつてもすぐに捕まってしまつう。

今回は世話係の一人、サラだ。

思わず不満の声を漏らしてしまうのだが。

「うゝあうっ」

「ふふ、駄目ですよロイ坊ちやま。一人でお散歩は危ないですからね。それに坊ちやまに何かあつたら私達が怒られてしまいます。」

「…あう」

まさしく正論なので言い返せない。

私が怪我をしたらおそらく世話係の人たちの責任となつてしまつう。

私だけの問題ではすまないのだ。

そう思うと毎回申し訳ない。

まあだからといって探索を止めるかと言われれば、それはまた別の話しな訳だが。

「奥様と旦那様に会いたかつたのですか？じゃあ私が連れて行つて

あげましようね」

いや、別に違うけど。

探索したかったただけだけど。

心の声が届くはずもなく、私は父と母の元に連行された。

コンコン。

「失礼します旦那様、奥様。」

「何だサラ、まだロイは昼寝の時間のはずだが」

「それが眠りが浅かったらしく、廊下を徘徊しているのをお見かけ
しまして…その、奥様は今安静にしていなければと思ひまして…」

「そうだな…分かった、下がれ」

少し考えたような仕草をした後、父はサラに退室を促した。言われるがままにサラは軽く礼をして私を父に託し、その場から去って行った。

父は私を抱き上げながらため息をついて呟くように言った。

「最近のお前は部屋から抜け出してばかりだな…そんなに昼寝がい
やなのか？」

「あい」

はい。

赤ん坊とは退屈なものなんです、父上。

「いや、それだけではないか……」

父がフツとかすかに笑って私をみつめた。

「兄弟が出来るのが待ち遠しいんだろう」
「……」

待ち遠しい……というより、ちょっと不安だ。

弟か妹か、どちらかは分からないが。

もし生まれてきたら、異質な自分が浮き彫りになってしまいそうで。

こちらの世界では常識的な魔法も、もしかしたら私は使えないかもしれない。

愛される術を知らない私は、どうすれば良いのか分からない。

頭が良ければいい？

強ければいい？

いつでも笑ってればいい？

でもこの腕の暖かさを知ってしまったから。

どうしても、離したくないと思ってしまっただ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4863n/>

公爵子息になりました。

2010年10月12日06時28分発行